

鍵はプロファイリングと勇氣 ～海外就職活動に見たキャリアの多様性～

近藤 俊哉



私は今、Genedataというソフトウェア企業のスイス・バーゼル本社で働いています。長らく日本の大学のバイオ系研究畑で過ごしてきた自分が、この地で、この業界のこの仕事に就くまでの道のりは、本人も予想外のものであり、多分にユニークな部分も含まれているかと思えます。キャリアパスは時代や環境、運や出会いに大きく左右されるものですが、一方で努力、意思、志向といった要素により形作っていきける部分があることも事実。今回、貴重な執筆の機会を頂く中、多少なりとも他の方の参考になればと思い、私の経験、特にそれぞれのステップで何を感じ、それがどうキャリアパスに影響していったかを中心にご紹介したいと思います。

何故研究の道に進もうと思ったか

大学の農学部で酵素化学を学び、修士まで過ごした後、博士は医学研究科で分子腫瘍学を学び、大学付属の研究所で助教をしていました。本稿の主題から逸れる研究内容自体の話は省略したいと思います。ただし多くの場合「博士課程に進み研究者の道を歩もうとした理由に、その後のキャリアを考える重要なヒントが隠されている」のではないかと考えています。自分の場合、小さい頃から生き物、生物学が好きだったことに加え、

医療への貢献 健康が人の幸せの中心だと考え、病気のメカニズム解明、治療法の開発に貢献したいと思っていた。

海外志向 両親が共に若い頃に海外滞在経験があった影響もあり、自分もいずれは海外に出ることを考えていた。サイエンスを学ぶことは、世界共通言語を身に付けることと捉えていた。

独自志向 人と違うことは価値を生むことだと考えていた。誰も知らない事にチャレンジして新たな価値を生みだしていくサイエンスの世界に興奮を覚えた。などのキーワードがあげられるかと思えます。また、育てていただいた諸先生方に怒られそうですが、純粋に研究活動を楽しんでいた以外、職業として将来大学の先生になりたいと具体的に思ったことはありませんでした。

本稿を読み進めると、後々これら私の志向が大きくキャリアパスに影響を与えていった様子が分かるかと思えます。志向、考え方というのは本当に人それぞれですので、特にキャリアに悩む方には、まずは自分の原点に戻るという意味で、特に子供時代や大学時代に何を思っていたのか、是非振り返ることをお勧めします。

留学・海外就職その1

日本で5年助教を務めた時点で30代半ば。すでに結婚し子供も一人いるうえでは、日本に留まるという道もあったのかもしれませんが、ただ、先に述べた海外志向もあり、自分にとって留学は、挑戦というより、人生のステージの一つを進めるために必須の選択でした。留学先が何処になるのかというのは運や巡り合わせの部分が大いですが、自分の意思の部分としては、

ヨーロッパ 家族を連れての海外生活なら、比較的ワークライフバランスも治安も良く、また古い歴史、多様な文化や言語に触れられる、ヨーロッパに行きたい。

挑戦的なテーマ ポスドクとして自分の力を試すなら、別分野へ広がる可能性のある難しいテーマにチャレンジしたい。

医療への貢献 基礎・応用面両方に目を向けられるテーマ、場所で研究をしたい。などを考えていました。

ヨーロッパにはバイオ系の研究拠点がいくつかありますが、スイスのバーゼルもその一つ。留学先候補として各地の大学や研究所を調べていく中、この製薬産業の街、そしてここに本社を構えるノバルティス社所属のユニークな研究所、Friedrich Miescher Institute for BioMedical Research (FMI) が目に留まりました。研究分野や興味に近いラボを見つけ、自分の強みや希望を訴えたメールを送ると、何と1時間ほどで「是非面接に来なさい」との返事がありました。他のいくつかの面接を絡めヨーロッパ面接ツアーをしたのですが、バーゼルでの面接では、説明した自分の強み・実績・希望と、ラボからの提案テーマ・要望がピタリと一致する不思議な感

覚があり、面接翌日にはオファーが届きました。私は決して引く手数多の業績を持っていた訳ではなく、事実他の応募・面接では相当苦戦してきた中、バーゼル行きは何か引き寄せられるように決まったのでした。

製薬産業の街バーゼル

スイスの北西、ドイツ、フランスとの3国国境に位置するバーゼルは製薬化学産業の街。ロシュとノバルティスという世界を代表する2大メガファーマを筆頭に、製薬関連企業が集積する一大産業クラスターです。当然ながらバイオ系の研究レベルは非常に高く、企業や大学の研究所に世界中から優秀な人材が集まってきています。私の勤務先FMIはノバルティスの研究所The Novartis Institutes for BioMedical Research (NIBR) とバーゼル大学両方に所属するユニークな研究所です。ここでの研究生活はさまざまな点で日本でのそれとは異なり、考えさせられるものがありました。以下にいくつか特徴をあげます。

研究所 ラボが集まって研究所を構成するのではなく、研究所という箱が効率良く運営され、これを各研究者が利用するイメージ。優秀なスタッフが運営するコアファシリティ、施設・物品購入の中央管理、その他、秘書、人事、経理、知財、ITなどの体制が備わる。

研究生活 上述の研究所体制、あるいは各ラボの技術員の充実により少人数ラボでもトップレベルの業績を出す。研究者の雑用は必要最低限。集中して研究ができ、夜中まで研究は希。子供がいる人はパートナーと時間を融通しながら協力。女性研究者も多い。コーヒースペースなどでは研究室を超えた交流も盛んで、時に共同研究にも発展。

研究者 多国籍。化け物のように優秀な人材も含め全体的にレベルは高い。その考え方もキャリアプランも多彩。もちろん人によるが、研究に加え、文化、政治、

経済やビジネスへの教養、あるいはコミュニケーション能力が高い人も多い。

製薬産業 FMIは一つの象徴だが、街全体としてアカデミアと企業の垣根が低い。共同セミナー、コラボレーションも多い。ベンチャー立ち上げ支援体制も充実。研究者にも製薬業を支える多彩なキャリアパスの可能性。

上記は企業所属のFMIに限った話ではなく、バーゼル大やETH (スイス連邦工科大) などトップレベルのところはどこも似た体制・傾向にあります。研究の世界は隔離された独特のものになりがちですが、その周辺サポート体制、産業への還元、人材の流れという点で、単なる産学連携以上の、研究活動が社会の大きな枠組みの中に組み込まれている感覚があります。これらバーゼルの雰囲気は自分のキャリア選択にも大きく影響していたと思っています。

プライベート・家族との海外生活

日本を離れる際、長男は2歳半。その後バーゼルで長女、次男に恵まれました。スイスは全体的に治安もよく、自然が多い中、住居環境もよく、また2度の出産も含めて医療のレベルにも満足。基本的な生活水準は非常に高いと思います。3人の子供達は小さい時や生まれた時からこちらの生活なので、途中で移ってきて言語や環境の違いに戸惑うということもなく、友だちを沢山作ってサッカーやテニスに明け暮れています。漢字を含めた日本語の読み書きには苦労していますが、週一回の日本語学校と通信教育で頑張っています。

職場はもちろんバーゼルの街中では大抵英語が通じますが、特に子育てではドイツ語が必要な場面が多々出てきます。私のカタコトレベルに対し、妻は努力を重ね、今では保護者面談などでもドイツ語で問題なくやりとりしてくれています。その他海外で生活し子供を育てて行くうえではもちろん数々の困難がありましたが、その度



バーゼルはライン川沿いの古都：趣のある中心部(左)から上流を向くとロシュタワーをはじめロシュのビル群(中央)、下流を向くとノバルティスのビル群(右)。人口20万足らずの街に時価総額でトヨタより大きい会社が2つある、と考えると少しイメージできるかもしれない。

に夫婦で相談、協力、時には喧嘩しながら乗り越えてきました。

友人の存在も大きかったです。FMIの同僚はもちろん、子供のクラスメートの親には製薬産業で働く外国人も多く、ほぼ全員英語を話すので、家族ぐるみで週末を一緒に過ごしたり、困った時に助けてもらったりもしています。日本人の友人も沢山できました。FMIは、農薬世界最大手Syngentaの本社など元はノバルティスと同企業であるいくつかの企業と同じ敷地にあり、FMIのメンバーは社員証を見せると敷地共通の食堂で社員価格のランチを食べることができました。そこでよく見かける日本人と話すようになり、そのメンバーをコアに周辺の日本人何人かと定期的な食事会をスタートさせました。皆日本では接点がなかったであろう異業種の顔ぶれでしたが、時に日本語でバカ話を交し、海外生活を助け合い、仕事の面でも刺激し合う貴重な仲間になりました。会はちょっとずつメンバーが変わりながらも10年続いていて、日本や他の国に移動したメンバーも含めると結構なネットワークになっています。

このように妻や子供達、友人達と過ごす時間が作れたのも、FMIでの研究生活で、良いワークライフバランスが保たれていた点が大きいように感じます。スイス人はヨーロッパでも特に勤勉ですが、他の西洋諸国の人たち同様プライベートは大切にします。私の帰宅は他に比べると遅い方でしたが、それでも家族との時間は十分取れてきたと思っています。子育ては仕事とはまた別のチャレンジ。特に海外では、やはり家族との協力体制があつてこそだと思っています。

日本に戻らない選択

FMIでの契約期限もある中、次の進路を決めなければなりません。研究者としての希望・目標に加え、当然ながら現実的なキャリアの可能性と収入面生活面の照らし合わせが必要になります。

FMI在籍中、がん研究を出発点に、自己免疫疾患など別分野への広がりを持つ研究成果をあげ、その業績で大学での講義や大手製薬会社でのセミナーにも発表者として招待されました。独自の仮説を立て、エビデンスを積み上げ、協力者を巻き込み、多くの人に示せる論拠の形にまで持っていきました。時間がかかり過ぎた点が悔やまれますが、胸を張れる成果だったと思っています。ただ、研究の世界でポストを得るのは至難の技です。家族の存在や年齢、今後の収入を考えるに、あまり長い期間不安定な立場で研究を続ける訳にも行きません。たと

えば厳しい就職状況の日本に戻ってポストが取れるか？そもそも他を押しつけて取れたとして、それは自分の希望のキャリアパスで希望の収入なのか？疑問に思うようになります。

先に触れたように、私はバーゼルに来て、研究周囲や製薬関係に大事な仕事があることを知りました。同僚の研究者たちが多彩なキャリアパスに進むのを目の当たりにし、また企業で働く友人たちからも多くの刺激を受けてきました。夫婦の協力で海外生活を整えてきた中、ここで日本に帰ってしまっているのか？しっかりとドイツ語で学び、沢山の友だちと野山を駆け回って遊ぶ子供達を、今から日本の教育システムに入れるのは正しい選択なのか？キャリア・プライベートの両面で、強くバーゼルの残りたいと感じるようになっていました。

もちろん長年の研究キャリアから離れる可能性があることに得体の知れない不安もありました。悩んだ挙句、原点に戻ります。自分は何故研究者を目指したのか？その道から降りても若かりし自分は許してくれるのか？

医療への貢献 研究上の発見でこれができるれば素晴らしいが、別の形での貢献でも自分は喜びを感じる。

海外志向 自分のこれは研究者を目指す以前からの志向。海外生活、異なる文化間の行き来が楽しい。

独自志向 ポストを求める人が列をなす研究の世界でなくとも、むしろ研究周りに自分のユニークな部分を使ってもらえる分野があればそちらに行きたい。

自分の中で納得し吹っ切れた私は、日本に戻らず、バーゼルで就職活動をする決意をします。

失業・海外就職その2

意を決し仕事探しを始めたものの、その道のりは非常に困難なものでした。徐々に分かってきたことは、まず、スイスの労働許可面での不利。詳しくは省きますが、私が経験のない非研究職に就くことは外国人雇用の必要性欠如の点から容易ではありません。また、企業の研究職は労働許可面では問題ありませんが、その競争は熾烈で、バーゼルのラボヘッド職だと数百倍の競争率になることもあります。私も研究職では何度か電話面接に呼ばれたことがありましたが、他の職で候補に残ることは皆無でした。

まったく進展しないままFMIとの契約も終了。失業し、滞在許可が切れるまでバーゼルに残って仕事探しを続ける中、開き直って考えました。「職探しは、バーゼルの製薬関係で経験を積むことの価値を信じるから。就職が無理ならしょうがないが、この地で得られるものは得て

帰ろう」と、極力コンピュータを閉じ、それまで以上に街に出ました。バーゼルで毎晩のように開かれる製薬関係のイベントには就職とは関係ないものでもできるだけ出席し、人と話し、情報を収集しました。

まず学べたのは最新の製薬企業動向。IT活用、Data Scienceが製薬業の新たな競争の中心として、Dataをいかに蓄え活用するかに関する話題で盛り上がっていました。中でも、定期的に開かれているDayOneというイベントには何度か足を運び、プレジジョンメディシンという新しく興味深い分野について学びました。また、製薬業で働く人とのネットワークも広がって行き、職務内容・就職に関する情報やツテも得ることができました。これらの方々や就職関係のイベントから得た情報で興味深かったのは以下の2点です。

- ・就職サイトに載る募集を待っているのは手遅れ。企業は正式に職務詳細や予算が確定するずっと前から人を探しており、ネットに出てくる頃にはほぼ候補が決まっていることもある。空きポストにいち早く辿り着くには人的ネットワークが大事。
- ・商品としての自分の本当の特徴や強みを知り、会社にもたらす価値としてCV(履歴書)に反映させることが大事。

再度しっかりと自己プロファイリングを行いました。食事会の仲間でビジネスコンサルタントの経験がある友人は、私の心の奥底にあるものが言葉として出てくるよう何度もセッションをしてくれました。彼はまた、ビジネスの経験がないという私の言葉を否定し、研究活動での経験をビジネスの言葉に置き換えてもくれました。結果、異なる複数の研究分野、サイエンスとビジネス、日本とヨーロッパなど、自分には、異なる何かと何かの間のインターフェースとしての役割に実績があり、またそこに強い価値と喜びを見いだす特徴があることが分かりました。自分の価値を表現した、以前よりずっと力強いCVが書けるようになりました。

明らかにチャンスが増えてきたのを実感する中、ついに後に就職が決まるGenedataのポストの話が出てきます。バーゼルでの人的ネットワークを通していち早く知ったポスト、イベントで何度も勉強してきたプレジジョンメディシンに関する仕事、またその役割は、日本オフィスとバーゼル本社、あるいはサイエンスとビジネスのインターフェースとしてのものでした。面接で自分の強みや希望と会社側の要望が一致する感覚は、FMIで仕事が決まった時と酷似するもの。やはり労働許可の取得には時間がかかったものの、採用まで、これまでの

苦労が嘘のようにスムーズでした。

プレジジョンメディシン

現在Genedataでは「Genedata Profiler」というソフトウェアの日本市場を任せられ、主なユーザーである製薬企業への紹介、販売、ユーザーサポートやコンサルティングを行っています。

私がバーゼルのイベントで学んだ通り、今医療の現場では、診断された病名に対して薬の選択をするこれまでのスタイルから、それぞれの患者さんの特徴に合った薬を選択する、プレジジョンメディシン(精密医療)の時代へ大きくシフトし始めています。背景には次世代シーケンサーなどのテクノロジーの発達により、遺伝子特性を含めた患者さんの特徴づけ(プロファイリング)が、より高速により安価でできるようになったことがあげられます。Profilerは、これら遺伝子データを含む膨大データの処理、あるいは患者さんを特徴付けるさまざまなデータの統合管理、解析を可能にする企業向けソフトウェアシステムです。薬が効き、副作用が出ない患者さんの特徴が分かれば薬品開発の成功率アップが期待されるため、製薬会社さんが競って導入を進めている分野。Profilerも欧米メガファーマとともに、その要望を聞きながら改良を進めてきたものです。

私の仕事内容は実験室でのそれとは大きく変わりましたが、がん分野をはじめとした研究経験・専門知識の活用、ソフトウェアユーザである研究者の方々のニーズの理解、また、本社に集まる欧米最新動向の日本への紹介という点で、実は自分のこれまでのスキルや経験を存分に生かすものです。同時にこれは自分の希望の原点に定めるものでもありました。

医療への貢献 プレジジョンメディシンの促進を通し微力ながらも医療に貢献できる点に喜び。研究で貢献するのは違う形で夢が叶っている。

海外志向 バーゼル本社に勤務し、日本に年3-5回、アメリカに年1回出張。異文化異言語のインターフェースとして働くことに喜び。

独自志向 強い研究バックグラウンド、バーゼルでの経験、英語、人脈、マネジメント力、インターフェースとしてのコミュニケーション能力など、他の人にないスキルセットを構築しそれを活かしている。自分のユニークな部分でアンメットニーズを埋めている感覚を味わっている。

多様なキャリアパス

私がバーゼルで目にしてきたのは研究者の多様なキャリアパスです。FMIの親しい同僚たちも、その次の行き先は大学、大手企業、ベンチャー、病院などさまざま、その職も研究職からメディカルアフェアーズ、レギュラトリーアフェアーズ、ビジネスディベロッパー、コンサルタント、メディカルライター、治験サンプル管理者など多彩です。Nature誌に第一著者として論文を書いた後、企業の非研究職に進んだ人もいます。Genedataに目を向けると、同僚はビジネスマンも含め多くが博士持ち。分子生物学、バイオインフォマティクス、コンピュータサイエンスなどの分野で実績を積んできた面々ばかりで、皆驚くほど優秀です。また失業中出会った元研究者の中には、大学の研究環境整備を行うリサーチアドミニストレーターや研究者のキャリアコンサルタント、研究関係のイベントオーガナイザーや政府機関で世界の研究動向を探る仕事をしている人もいました。研究周辺も含めた多様なキャリアパスの存在が研究全体を盛り上げているように感じます。

もちろん多くの可能性が用意されているという状況は日本のそれとは大きく異なりますが、私も調べてきた限り、日本のジョブマーケットも大分変わってきている、また変わらざるを得ない状況になってきているのも事

実、あるいは可能性を求め海外に出る選択肢だってあるかと思います。いずれにしても、研究者側が日頃から自分の業績や能力と向き合い、その研究経験をどう生かそうかと悩み、もがいている状況は日本もバーゼルも一緒なのです。

キャリアが多様であることはまた、皆それぞれ進む道が異なるということを意味します。大学や研究室など、他の人と共有する部分も多かった段階からキャリアステージが上がれば上がるほど、自分だけの道を独りで歩んでいかなければいけません。皆、能力も経験も環境も志向も価値観も違う中、キャリアパスに王道も正解もありません。それぞれのステージで努力し、業績、能力、経験を積み上げることはもちろん必須ですが、次のステージ選択の際に必要なのは、自分は何者か見極めるしつかりとしたプロファイリングと、他と違う道に進みマイノリティになる勇気かと思っています。

医療はプレジジョンメディシンの時代、それを支えるのは、それぞれの患者さんは皆特徴が違うという考えであり、患者さんの適切なプロファイリングです。それぞれの特徴が違うのはキャリアパスも一緒。特に若手の研究者の方々には、正しいプロファイリングと少しの勇気を持って、多様なキャリアを進んでいって欲しいと思います。

＜略歴＞京都大学農学部（食品工学）、同農学研究科（応用生命科学・農学修士）、同医学研究科（分子腫瘍学・医学博士）にて学んだ後、京都大学再生医科学研究所助教、NIBR/FMI (Basel, Switzerland) 博士研究員を経てGenedata AG (Basel) 入社

＜趣味＞テニス、旅行、サッカー等